



2017.11.吉日

連携パス コーディネーターだより NO. 9

初冬の候、先生を初めスタッフの方々におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。平素は、格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

夏真っ盛りの時期に、連携医療機関と連携患者さんに肝がんパスについてお話を伺う事ができました。今回は一部ですが、皆さまに報告させていただきます。

今回、お話を伺ったのは、須山医院の須山浩美先生です。インタビューを快く引き受けて頂き、早速お邪魔しました。いつも通りの優しい雰囲気でご挨拶頂き、私たちの緊張もほぐれていきました。先生には、がん地域連携パスが開始して1年が経過する頃から連携して頂いています。その中で、気づいた事をお話し頂きました。



メリット

同じ治療計画がある事で、治療の自己中断なく、必要な検査も継続でき、過剰な診療もなく、病状に合った治療方針が共有でき、異常の早期発見ができる。肝がん術後の患者さんは、再発も多く治療を繰り返す中で、必要なシステムと感じている。

パスのメリットが共有できて嬉しいです。連携医の先生方にはパスファイルを必ず見て頂き、診察時にパスファイルのメモ欄に印鑑を押して頂いているので、患者さんも励みになっているようです。

以前、肝がんは再発していないけど、生活の様子から通院が難しくなっている情報を頂き、パスを中断した患者さんがいらっしゃいました。治療方針に適しているかどうか評価していただき助かっています。

困った事

肝がん再発治療のためのパス中断が分からなかった。パスファイルに医師記録できる様になっているが、患者さん保有のため限界がある。病状説明も分かりにくく、患者さんの訴えの対応に苦慮する事もある。

先生方にはご迷惑おかけしている事が分かりました。経過が長いので、病状説明など、当院主治医へ確認して頂く必要性を感じました。

提案

パスコーディネーターは、患者さんが診察の場で聞けない事の代弁者になることも必要。また、パスのゴールを決めてはどうか。患者さんのモチベーションを保つためにも必要なのではないか。

本当に患者さんの立場を理解したアドバイスをいただきました。不十分な点は多いですが、心配事に対応したいと思います。また、私たちの中に、肝がんパスはエンドレスという固定観念があったように思います。まだ、具体的にはありませんが、より良いパスになるよう知恵をしぼらないといけないと感じました。今後も、このような意見交換の機会を設けることができたらと思いました。

Yさんのお宅へ伺いました。



肝がんパス利用中のYさんのお話を伺いました。

何年も肝臓の薬を飲んでいた中、吉岡医院から当院へ紹介いただいたのが、当院とのご縁の始まりでした。その後の経過観察の中で、肝がんが見つかり、手術を勧められました。その時には、ご本人は、「先生、もうちょっと、80ぐらいまでマメでおられりゃいいけん、手術せんでいいですわ。」と返事をされたそうです。娘さんが、「切ってもらわんといいけん。」とYさんを説得され、手術に踏み切ったそうです。

肝がん切除術後から吉岡医院と肝がんパスの連携を開始しました。吉岡医院と当院で定期的に計画的な検査を受け、早めに対応してもらえる事で、安心しているとお話しされました。今になっては、「もう少し、長生きするわ。」と考えが変わったそうです。

奥様と2人暮らしですが、お子さん、お孫さん、ひ孫さんに囲まれて、賑やかに過ごしておられます。「そうでもね。おかげで寝こまんでもいいし、寝ちよれんだもん。まだ、(今から生まれてくるひ孫さんの)パンパースを替えたらんと、子守りしちゃらんと。それでも、こつちが元気だけんね、できる事だ。忙しいわ。」と、ひ孫さんの子守りの様子を面白楽しくお話し頂きました。

お宅までお邪魔したインタビューで、ご本人と奥様の夫婦の歴史も交え、ゆっくりお話しでき、急性期病院では難しくなっているその人の背景を知る事の大切さを再確認する場になりました。厚くお礼を申し上げます。



肝がんパスに思う

内田 靖 消化器内科医師 検査部・検診部長

肝癌はなかなか根治(100%治ること)することが難しく、肝臓の別な場所から新しく病気が出現することの多い病気です。そのため1度病気にかかるといつまでも病院に通うこととなります。その都度患者さんやかかりつけ医の先生とお話することもあります。繰り返すうちについ連携がおろそかになることが感じられていました。

今回ご縁があり肝がんパスの作成に携わらせて頂きました。長期の通院となること、多数の検査(採血やCT、MRIなど)があることから、できるだけ簡便なパスとしました。経過は分かりやすくなったと自負していますが、かえって細かいやりとりが難しい形となったことが反省点です。できるだけ多くの人に使用してもらい、少しずつ改訂するつもりでしたが忙しさにかまかかって以前のものであったことが現在の問題と感じています。

患者さんやかかりつけ医の先生の生の声を聞かせていただき、改め、みなさんに使用してもらえるパスの形を検討していきたいと思いました。今後とも宜しくご指導の程お願いします。

 この度は、須山先生、Yさん、内田先生から肝がんパスの思いが聞け、パスコーディネーターが前向きとなる刺激を受けました。今後も患者さんに寄り添ったパスとなるよう努力したいと考えております。

 ここで少し肝がんパスについて簡単に説明させていただきます。下に患者さんが持参する肝がんパスファイルを示しました。

連携医療機関・当院の診察結果を○△×で入力します。
検査データ、放射線レポートも全てファイルに綴じます。
このファイルで情報共有を図ります。

再発があればパスを一旦中断して治療をします。可能ならばパス再開し、連携をお願いします。

乳がん地域連携パスに思う

曳野 肇 乳腺外科・化学療法科部長

平素より松江圏域の乳がん地域連携パスの発展にご尽力を賜り、誠にありがとうございます。
パス運用開始後6年半を経過しましたが、75の連携医療機関、284名の連携患者さんで連携パスを運用しています。パスを脱落する患者さんは全体の6.5%と少数にとどまっていることは、とりまなおさず連携医療機関の皆さま方のご協力のおかげと心から感謝しています。

さて、11月2日に当院講堂において、乳がん地域連携クリティカルパス勉強会を開催いたしました。

- 1) 乳がん診療における遺伝子診断について(曳野)
- 2) アピランス支援～がん患者の自分らしさを支えるために私たちができること～
(山本がん化学療法認定看護師)
- 3) ホルモン治療中の食事について(藤原管理栄養士)
- 4) 乳がん手術を受ける患者へのアピランス支援(横地乳がん看護認定看護師)

上記の内容で行い、48名の方々にご参加いただき、盛会に終わりましたこと、感謝申し上げます。
今回当院では、横地恵美看護師が二人目の乳がん看護認定看護師になりました。林美幸乳がん看護認定看護師と共に、治療法の決定支援だけでなく、連携患者さんが健やかに生活されるよう、生活の質を高める体制づくりに努めていきたいと考えています。

今後も当院との松江圏域の乳がん地域パスにご指導いただきますよう、お願い申し上げます。

はじめまして、乳がん看護認定看護師:横地恵美です

現在病棟で勤務し、主に手術を受ける乳がん患者さんの看護を行っています。病棟では退院後の生活を見据えた看護を実践し、病棟看護師の役割モデルになれるよう努めています。また病棟外の活動として、乳がん患者さん同士の情報交換をする場を提供するために患者交流会を開催しました。今後も定期的開催していく予定です。患者さんの気持ちに寄り添い、がんであってもその人らしい生活が送れるように支援していきたいと思っています。

今年の乳がん地域連携パス勉強会の講師をご紹介します。左から、曳野、横地、山本、藤原です。
講義内容は当院のホームページから見られますので、ご利用ください。
毎年、興味を持っていただける内容をご用意していますので、気軽にご参加頂ければと思います。



連絡先:松江赤十字病院 地域医療連携課
TEL:0852-32-7813 FAX:0852-27-9261
パスコーディネーター:坂本幸子 松本智子